

公教育から外れた若者の学歴格差を破壊する「言葉の力」

はじめに ~不良の私が抱えていたコンプレックス~

学歴が低く暴力に訴えかける若者は、その他の一般的なコミュニケーション手段を扱えないことによって生まれています。不良と呼ばれる若者とそうでない若者において、感じることや伝えたいことに大きく差はありません。例えば、ある問題が起きた時に、解決したいと思う感情は皆一律に持っており、そのためにコミュニケーションをはかる必要があることも理解しています。しかし、学歴が低い若者はそのコミュニケーションとして最も大切な”言葉”つまり国語をきちんと学んでおらず、扱うことができません。したがって、言葉で経緯をすり合わせ、議論を行い、解決に導くこの過程で最も大切な部分を”暴力”に変換せざるを得ない状況となってしまっているのです。

私は、京都府西京区という田舎街で育ちました。地場の繋がりが強い街であり、上下関係を重んじるため、属するコミュニティによって生き方やコミュニケーション手段が大きく変わります。私が育ったのは掲題の通り不良コミュニティそのもの。先輩からの依頼は絶対であり、軽犯罪も横行。そんな環境で育った自身もご多聞もなく不良として育ち、高校を中退、飲食バイトと競馬で青春時代を過ごし、19歳で第一子を授かりました。

そんな私は、現在ではヤンキーインターンというサービス名の非大卒向け育成事業を行なっています。自分と同じ様な経験を持つ非大卒の若者に”都心体験型インターンシップ”という地元では経験できない様な学習体験や体験環境を提供し、ついこの前まで現場やフリーターで働いていた若者に対して、上場企業やIT企業への就職を可能にする様なカリキュラムを提供しています。このカリキュラムは、私自身が進退極まりどうしようもない状況の時に一念発起しビジネスの世界に飛び込み、不良コミュニティから社会へ脱出する際の、ある種壁の様に感じたものへ、ぶつかり乗り越えた経験を元に構成を行なっています。

それが、先述した内容であり、本事業のテーマであり、今回の主題となる、学歴格差が引き起こす言葉を扱えないことによって引き起こされる問題なのです。

社会に飛び出そうとした当初の私は、コンプレックスを抱えておりました。それは、自身の口癖にも現れていた「なんて言ったらいいかわからない。」という言葉です。

地元で根を張り、不良真っ盛りだった頃の私のコミュニケーションはいたってシンプルでした。気持ちを伝えたいが、伝わらなくて誤解され、腹が立ち、結果的に手を出す。これで解決することができる環境でした。しかし、社会はそうではありません。手を出した瞬間全てが終わってしまうため、きちんと言葉で伝えきらないといけません。

かと言って、今更国語を教えてくれる人もおらず、自分でできることは本を読むことぐらい。でも漢字が読めない。一度教育から外れると再び戻るには過酷なハードルとなる悪循環を繰り返していました。

そんな状況で入った会社において、私は運よく素晴らしい上司に出会うことができました。その人は理解が遅く、すぐにイライラする私に丁寧に根気よく言葉の大切さを教えてくれました。

結果的に私は、当たり前ではありますが、社会に出て一度も暴力というコミュニケーションを取ることはなく、全て言葉で解決することができ、営業成績でも同業種で日本一を取ることができるようになりました。

この”暴力から言葉への変換”を、同じ様な課題を持つ非大卒の多くの若者に体験させ、可能性を活かせない若者たちに”言葉の力”という草薙の剣を与えたいと思い立ったのが今回の実践に置ける経緯となります。

実践の狙い ~誰も気づけていなかった本当の課題~

手探りの中本事業を通し現在に至るまで250名近くの卒業生を輩出してきましたが、その中で、参加する生徒

には、大きな学歴差はなく皆同様に地方出身であり年齢層も変わらないにも関わらず、成長スピードに差が生まれること疑問を持ち、インターン参加時に持つ課題を調査し、学習期間において成長する様子の観察分析を続けました。

ビジネスの類の内容を話す講演では解決できない「壁」もっと本質的なところでの躓き。その要素を分解すると「言語的課題」つまり、「論理的思考力」「文章構成力」「自己主張が弱い」という大きく 3 つの課題があることがわかりました。

一般的にはこの成長の差は、単に個体差であったり環境依存によって結論づけられる場合が多いですが、本事業の様に、都心体験を行うために、既存の環境から移動し、均一した若者を集めたにも拘らず起こる根本には別の課題があるのではないかと思わざるをえず、仮説検証のため今回の実践を進めることとなりました。

実践にあたって ~公教育からの使者~

早速私は、生徒達に実践的なビジネス研修などから身を以て自主的に学ぶだけではなく、学術的観点、特に国語的観点からのアプローチが必要と仮説立て、かつて私に対して根気強く教えてくれた上司の様に、根拠があり論理立てて指導できる人を探し、協力を募りました。

そこで一番手をあげてくださったのが、今回実践に伴い全面協力をいただいた公立高校国語教諭 S 祥子先生です。

S 先生は教育大学を卒業後、民間企業に就職。そして結婚、出産を機に一時は専業主婦に。しかし「自分の子供が生きる世界が、平和で、幸せな世界であってほしい」という思いを抱いた事などの様々な理由が積み重なり卒業から長い月日を経て教師として新たにスタートされたという経緯をお持ちです。日々の生活の中で、所得格差、文化的格差、希望格差、選択格差が固定化していく現状に対して「国語教育」で何かできることはないかと考えていたところ、NHK のクローズアップ現代で弊社の取り組みを知り協力を申し出ていただきました。

既存の教育機関では見放されて来た彼らにとって、「先生」というのは天敵の様な存在。しかし、コミュニティが変わり学ぶための姿勢が整った生徒であること、また S 先生の歩まれた軌跡や何よりも「生存率を上げるためには母語の力が絶対に必要」という強い信念裏打ちされた言葉を聞き、非大卒の彼らに対して近い距離で向き合っていただけなのに適任ではないかということで、今回の試みが実現するに至りました。

既存の教育では彼らに与えられなかった武器を今回の実践において与えることができるのかが、最大の着眼点となります。

指導の実際「~言葉の力で夢を叶える~」

授業デザインにあたり、生徒たちが抱える課題【1 論理的思考力 2 文章構成力 3 自己主張が弱い】という 3 点、

具体的には、企業の説明会があっても、最低限相手に伝わる「感想文」が書けず就職に繋がらない・考えを整理して話すことができない、などの課題をどう、限られた回数の授業で解決の糸口をつかませるか、また、総じて「勉強する」ということに対して抵抗感や「どうせ自分ではできない」というコンプレックスを抱えている生徒に対し、学びへのハードルいかに下げることという点が大きな課題でした。

S 先生との話し合いを通して、以下の 3 点を柱とし、学びを習慣化させる手立てを盛り込んだ内容とすることに重きを置き、全 2 回の授業をデザインしました。



HASSYADAI メンバーの「言葉」的課題

- ① 論理的思考力
- ② 文章構成能力
- ③ 自己主張が弱い

**本時目標：感想文をしっかりとかけようとする
学びの重要性を理解する**

- ① 「言葉の力で夢を叶える」という分かりやすく生徒のモチベーションが上がる目標設定
- ② 語彙力・「具体」と「抽象」を往還させる技術の大切さへの気づきを促すことにポイントを置いた授業構成
- ③ 論理的思考とプレゼンテーション能力を身につけ、読書を習慣化させるきっかけとしての「ビブリオバトル」

生徒が抱える言語的課題を「言葉の力で夢を叶える」という分かりやすい目標に落とし込み、技術としてはまず「最低限相手に伝わる文章の型」を習得するという一つの到達目標、つまり「相手に伝わる『感想文』をかけるようにする」ことを到達目標とします。そのために、ラーニングピラミッドを提示し「誰かに伝えるために聞くこと」つまり「アウトプットを意識した生活」の大切さなどを説明することから始めました。

良い感想を書くためには
→「どのような姿勢で受講するか」が大切。

- ①インプットしたことをメモする
- ②**目的**を持って聞く
- ③ここにいない誰かに**説明**できるように聞く

授業の内容としては

そもそも「言語とはコミュニケーションのための道具なのか」というテーマを様々な具体例を通して打ち消していき、「人は言葉の力で気持ちをも変えることができる」「人は言葉をとって世界を見ている」という事実を腹落ちさせ、「母語の豊かさと、実際の豊かが同期するの可能性に気づかせ、まずは日常生活の中で「語彙力を身につける習慣」がいかに大切かという事実を納得してもらいます。

例えば「リーディングスキルテスト」に出題されている

【二つの文の意味は同じか】

- 1「幕府は、1639年、ポルトガル人を追放し、大名には沿岸の警備を命じた」
 - 2「1639年、ポルトガル人は追放され、幕府は大名から沿岸の警備を命じられた」
- という問題も、「幕府」「ポルトガル人」に「ミッキー」「プーさん」を代入すると誰も間違えません。

つまり生徒たちが抱える「話の意味が分からない」「文章が読めない」などの「言葉の問題」は「語彙力」を身につけることによって解決する可能性があることをまずは理解してもらいました。

次に「論理的」とは、「分かりやすく相手に伝わること」と定義し、そのためには「具体と抽象の往還」が必要であることへの理解を促しました。

そのために、まずは「具体とは、はっきりした姿や形をもっていることと現実に即していること」「抽象とは、具体的な性質の一つを抽出すること。他との共通点に着目し、一般的な観念へとまとめあげること。」という言葉の意味を理解するため、様々なワークを通して練習し、次に「具体と抽象を往還させる」練習を行いました。

具体的には①やっていると時間を忘れること②子供のころ大好きだったこと

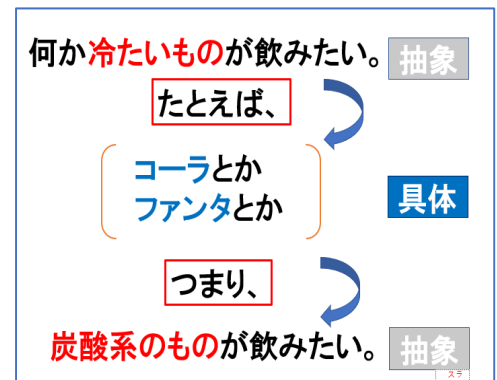
を書かせ、ペアワークでそれらの共通項を抽象化させるワークを行い、「抽象化の先に夢（人生のミッション）のヒントや、あなたの金脈のヒントがあるという指摘。また、言葉の解像度を上げることで描けるヴィジョンも変わってくるし、「夢」というものは「言葉の力で育てることができるといことなども指摘していただき、インターン中の生徒への学びのモチベーション向上を図りました。

文章とは単語と単語の塊をつなぎ合わせたものだから、単語の意味に抜けがあると文章の全体の意味は記憶に残らない。

読書の質を上げるためには語彙力を上げることがとっても大切

言葉に興味を持つ→
調べる→使ってみる

言葉に敏感になる
一瞬一瞬選択する



第一回目は、それらの練習を生かし、「具体抽象の型」に沿った「感想」を書くということが1時間目のゴールとなります。

今までただ漠然と考えていたことに枠組みが与えられたことで、まずは「書くこと」へのハードルがぐっと下がり、記述内容の質が大きく向上しました。また、どうしても書くことが厳しい生徒に対しては「一文は60字以内に」「テーマは一つに絞る」などの具体的なアドバイスを、そして表現が稚拙になる生徒には「形容詞を熟語に言い換える」「類語、連想語アプリなどを用いて別の言い回しに変えてみる」といった具体的なアドバイスをいただき、改善につなげました。

第二回目として、ビブリオバトルを実施。第一回の段階でプレゼンテーションのポイントを「聴き手への貢献」「パワーワードを用いる」という点に絞り、また、「ノンフィクション」「少し背伸びをする」などいくつかの縛りの中で本を選ぶように指導していただきました。

チャンプ本には豪華ランチというインセンティブをつけ、読書への苦手意識の払拭や、ゲーム性を高める工夫をしました。

5人1チームに分かれ、まずはチーム内チャンプを決定し、勝ち残った生徒で決勝戦というルールで行います。研修ルームに生徒たちの声が響き渡る活気あふれる時間。決勝に残った生徒のプレゼンテーションに対し全員で投票を行い、チャンプを決定しました。楽しみながら色々な本と出会い「言葉の力」も磨くことができる。S先生主体で行ったビブリオバトルが現在ではハッシュタグの文化になり、社員生徒ともに「読書の価値」を共通認識として持つことができています。

生徒たちの反応 現れた結果

「よし！今から本屋に行くぞ！」S先生の講義の後、それまで本を読むなんて必要ないと持論を持っていた生徒が開口一番に叫びました。生徒に起こった変化はこれだけではありません。

ヤンキーインターンにて実施しているカリキュラム内でも次々に起こりました。毎週金曜日に企業の人事にお越しいただき、説明会を行っていただいた最後に感想文を提出しフィードバックをいただくというカリキュラムでは、これまで感想文の内容について優秀だと評価いただく生徒が全体の2割程度であったにも関わらず、5割近くに増加。また同コミュニティ内の感想文などでは価値観の画一化・同質化などから、同じような文章が生まれがちになってしまう所、多様な感想を持つ生徒が増えたとフィードバックをいただくようになりました。

これは一重に「型」の習得と具体抽象の思考操作概念の取得によって各個人が持つ思考を表現できるようになったのではないかと考えます。

感想を書いてみよう

私に伝わるように意識

- ①お礼
- ②抽象 自分の思い（連想類語辞典活用）
- ③具体 例えば～ 具体的に言えば～
- ④抽象 ②をもう少し発展させた言葉
- ⑤具体 自身の変容（今後の方向性）書く
- ⑥お礼

まずは質より量。SNSなど恐がらず発信！

プレゼンテーションとは、「贈る・差し出す」という意味の「present」が語源であることからわかるように、単なる情報伝達ではなく、「相手（聞き手）にメリットを与える」ことでなければなりません。「相手（聞き手）の心を動かし、行動を起こさせる」ことがプレゼンテーションの目的です。

①影響力(変容→他者への貢献)

書き言葉 = 文字



話し言葉 = 声



消えてしまう

② パワーワード

またこれまで生徒同士で起こったことのないような議論も起こり始めました。

ヤンキーインターンでは研修期間中の生活インフラとなる、食費・住居費(シェアハウス)・水光熱費も無償提供しています。そのシェアハウスでの共同生活において、これまで社員主導でのルール設計を行っていたのですが、生徒からこのようなルールがあった方がいいのではないかとといった提案や、日々の生活態度をもっとよくしようなどと、自発的なディスカッションが起こり始めました。

これは潜在的に問題視していた課題を、言葉の力によって顕在化することができるようになったという、私たちとしても副産物的な変化でありました。

「学歴」を持てずとも、「挑戦」を選んだ結果の人しかいない場での授業を通し、そもそもの能力以上にモチベーションの大きさが学びの姿勢と相関することを実感しました。「好きな言葉は??」との問いに「やっべ。ラーメンしか思いうかばね」というような生徒でも食い入るように授業に取り組み課題に対し真摯に向き合っていく……。ハッシュダイが理想とする「選択格差のない世の中」は実現可能かもしれないという希望をもちました。

また、2018年6月に文部科学省 経済産業省 から相次いで行われた提言(政策ビジョン Society5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～ 「未来の教室」と EdTech 研究会第1次提言)での共通点に、学習者は「学年依存ではなく多種多様に混ざり合っている」教える人は「教師に限らない」場所は「教室に限らない」とありますが、それを体現する組織がハッシュダイであり、公教育との相互補完的な実践を行える豊かな可能性を感じました。

そして、S先生自体も国語教育に携わる身として「語彙力の重要性」「読書の楽しさ、読書習慣の重要性」に気づき、それを日常生活の中に落とし込むことの大きな可能性を肌で感じることができ、学校教育での実践にも大きく還元できる経験、気づきを得ることができたというような、お言葉をいただきました。

ー今後について～彼らが伝播の媒介に～

そして、ここで生まれた変化は彼らの習慣となり持続性を持つ一方で、彼らを起点にした自然発生的な非大卒の若者たちの国語力改善を引き起こしております。

現在 SNS の発達により、彼らの変化は身内だけの気づきに止まらず、友人やその周囲にまで容易に伝播していくようになりました。私自身が言葉の力を身につけ、ヤンキーインターンのようなコミュニティを作り上げた例が、マイクロ単位で起こり続けているのです。

今まで多くの方々が非大卒の選択格差の是正に取り組み、躓いてきた最も大きな原因が”教育”することにフォーカスしてしまったからだと思っています。今後最も大事となるのは受動的な教育環境の提供ではなく、能動的な学習環境を用意すること、その役割をハッシュダイが担い、公教育の先生が教育の提供を行い相互に協力することによって、持続可能な学習環境、若者が起こす非連続的な変化の起点を生み出すことができるのではないかと考えています。

今後も既存の教育という空想のルールから外れた若者たちの受け皿となる様に活動を進めてまいります。